モバイル時代の鯨捕り

浜口 尚（はまぐち ひさし）
園田学園女子大学短期大学部助教授

捕鯨法は変わらないが…

手投げ銛を打ち込まれ、銛綱一本でつながっているボートを勢いよく引っ張っていたザトウクジラが急に方向転換し、ボートに向かって来たときの話を聞いたことがある。怖さのあまり、鯨捕り全員、血の気が引いてしまった。その直後、ザトウクジラの背中でボートが跳ね上げられ、全員が海の中へ。ビニール袋に入れていた無線機のスイッチを入れ、救援を依頼して事なきを得た。そんな話である。

カリブ海の小島、ベクウェイ島でのザトウクジラ捕鯨を追い始めて一五年になる。その間に捕獲されたザトウクジラはちょうど一五頭。平均すれば年間一頭の捕獲という慎ましい捕鯨である。米国の帆船式捕鯨船に積み込まれていた捕鯨ボートを模して建造された八メートル強のボートに六人が乗り組み、手漕ぎ・帆推進でクジラを追跡、手投げ銛を打ち込み、最終的にはヤスで仕留めるという捕鯨法は百数十年間変化していない。唯一変わったのが高台の見張りから鯨捕りたちへの連絡法である。かつては手鏡を太陽に反射させてクジラ発見の合図が発せられたが、その後は無線機となった。

携帯電話で美味を追う

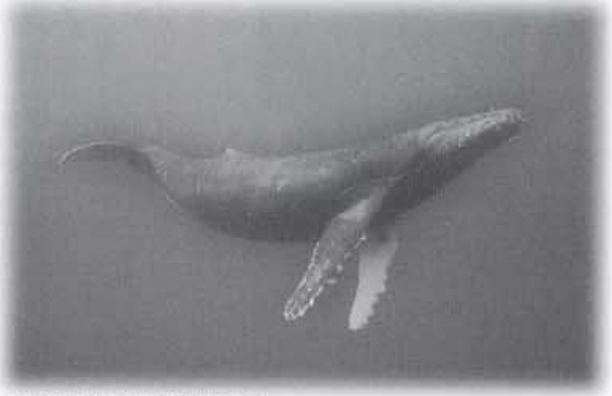
二〇〇二年、ベクウェイ島にも携帯電話会社が入ってきた。しかも三社がほぼ同時期にである。競争があるから料金は高くはない。鯨捕りたちも相次いで携帯電話をもつようになった。最近ではクジラ発見の第一報が見張りから携帯電話で鯨捕りたちのリーダーである銛手に入る。その後、銛手から他の鯨捕りたちに携帯電話で連絡が流れる手順となっている。もちろん、鯨捕りたちは追跡方向の確認やボートの転覆に備えて、洋上にも携帯電話を持参する。万が一に備えて厚目の防水ケースに入れてある。

ザトウクジラの捕獲は年に一度あるかないかの出来事であるから、クジラを捕らえると島民は競って肉や脂皮などを買い求め、クジラ料理を賞味する。そのことによって、彼らは捕鯨の島の住民であることを実感するのである。時が経っても変わらないのが、島民の捕鯨への情熱とザトウクジラ料理のおいしさである。

筆者も現地で二度、ザトウクジラ料理を味わったことがある。初めて食べたときは、おいしさのあまり山盛りの一皿を平らげてしまった。そういえば、二度目にザトウクジラを食べてから七年が経つ。二〇〇六年の漁期には、筆者の携帯電話に捕獲成功の連絡が入ることを願っている。通知を受けてから現地に出かけて行っても、食べる量は十分にあるはずであるから。

ザトウクジラ
（学名:*Megaptera novaeangliae*）

ナガスクジラ科。極地から熱帯までのほぼ全海域に生息している。成熟個体の体長は12～14メートル、体重は30～40トン。ベクウェイ島民が捕獲対象としている北大西洋系統のザトウクジラの生息数は1万600頭以上と推定されている。同島民によるザトウクジラ捕鯨は国際捕鯨取締条約において先住民生存捕鯨として5年間に20頭を超えない捕獲が容認されている。



株式会社データクラフト　素材辞典 Vol.72より

探鯨中。右下部に防水ケースに入った携帯電話（2005年）

解体後に残ったのは骨と不可食部分だけ。骨は装飾品等に利用する（1998年）

浜に並ぶ2隻の捕鯨ボート。全長8.2メートル、幅2.1メートル（2001年）

1日の仕事を終えた6人の鯨捕り。この日は捕獲なし（2005年）